

国土交通省初「KidZania」と連携した広報 ～「Out of KidZania 国土交通省関東地方整備局 洪水から街を守る仕事体験 in 荒川」～

萩原 毅

関東地方整備局 荒川下流河川事務所 地域連携課 (〒115-0042 東京都北区志茂5-41-1)

国土交通省は2015年9月に発生した関東・東北豪雨による被害を踏まえ「水防災意識社会 再構築ビジョン」を策定。協議会を設置し関係機関と連携しながら、ハード・ソフトが一体となった取組を進めている。この取組の一環として各々の機関において、防災教育を進めることとしている。荒川下流河川事務所では、子ども達やその保護者をターゲットとした水防災意識のさらなる浸透を目的として、子ども達の職業・社会体験のノウハウを持つ「KidZania」と連携し、KidZaniaの施設外での仕事体験をする1プログラムとして「Out of KidZania 国土交通省関東地方整備局 洪水から街を守る仕事体験 in 荒川」を実施した。

キーワード 防災教育、KidZania、広報、イベント

1. はじめに

国土交通省は、2015年9月に発生した関東・東北豪雨での鬼怒川決壊による被害等を踏まえ「施設では防ぎきれない大洪水は必ず発生するもの」へ意識を変革し、社会全体で洪水に備える必要があるとして「水防災意識社会 再構築ビジョン」を策定し、各地域において、河川管理者・都道府県・市町村等からなる協議会を新たに設置して減災のための目標を共有し、堤防のかさ上げや浸透対策などの洪水氾濫を未然に防ぐ対策や堤防裏法尻の補強などの危機管理型ハード対策を実施するとともに、氾濫想定区域等の公表、ハザードマップの改良、事前の行動計画（タイムライン）の作成や避難行動のきっかけとなる情報をリアルタイムで提供する住民目線のソフト対策を進めるなど、ハードとソフトを一体とした取組を進めている。

また、2017年6月には「水防災意識社会」を再構築する取組を、さらに充実し加速するための緊急行動計画をとりまとめている。これら取組の一環として、各々の機関において、円滑かつ迅速な避難のため、平時からの住民等への周知・教育・訓練に関する事項として、防災教育を推進して行くことが求められている。

このような背景を踏まえ、防災教育をより効果的に推

進するため、子ども達への水防災意識の浸透とその保護者を含めた水防災意識を向上することが、地域住民の水防災に対する意識を高めることに繋がると考えた。

水防災意識の向上への広報展開については、これまで施設の見学会や企画展の開催などによる情報発信を行ってきたが、一部の住民への普及啓発にとどまり、広域的な情報発信においてはさらなる強化・改良が課題であった。さらに、ウェブページや講習会等のような一方通行的な情報ではなく、荒川下流河川事務所の仕事を実際に体験してもらうことにより水防災意識のさらなる浸透が図れるのではないかと考えた。

体験型の企画立案にあたり、なるべく子ども達が積極的に興味を持って防災に取組むためのコンテンツを検討したところ、体験型イベント等のノウハウをもった企業と連携することが効果的な広報展開につながると考えた。子ども達がリアルに体験することで、楽しみながら社会的な学びを学ぶことができる子ども向け職業体験のノウハウを有し、高い集客力を継続的に有する職業・社会体験施設「KidZania」と連携を検討した。

「KidZania」では施設内での仕事体験が有名であるが、よりリアルな仕事体験を目的として、KidZania施設内ではなく、実際の職場をフィールドとして仕事体験をする「Out of KidZania」というプログラムがあり、このプログラムの一環として荒川下流河川事務所の仕事体験が

できないかKidZaniaに伺ったところ、国土交通省の仕事体験メニューがなかったことから是非実施したいとの返事を頂き、「Out of KidZania 国土交通省関東地方整備局 洪水から街を守る仕事体験 in 荒川」の実施に至った。

2. 「KidZania」及び「Out of KidZania」とは

KidZaniaは、子ども達があこがれの仕事にチャレンジし、楽しみながら社会のしくみを学ぶことができる「子どもが主役の街」であり、約3分の2の子どもサイズに作られた街の中で、様々な仕事やサービスを体験できる職業・社会体験施設である。体験できる仕事やサービスは約100種類、実在する企業がスポンサーとなるパビリオンは約60施設あり、本格的な設備や道具を使って仕事の体験ができる。

街には、現実社会で目にする銀行や警察署などの施設や消防車や救急車なども走っており、ユニフォームを着て仕事の体験ができる。

Out of KidZaniaは、子ども達にもっとリアルな体験をしてもらいたいという思いから生まれたプログラムであり、KidZaniaの街を飛び出して、実際の仕事現場を知ることができる。例えば、東京メトロでは総合研修センターでの運転シミュレーション体験、車両内ドア点検などの仕事体験、長崎県平戸市では、漁師の仕事体験を実施している。



写真-1 KidZania 内部の様子 1)



写真-2 Out of KidZania の様子 2)

3. 実施までの流れ

(1) 飽きさせない仕事体験メニューの検討

Out of KidZaniaというプログラムを活用するにあたり、リアルな体験をしてもらいたいことから実際の仕事現場である河川敷での施工監督や河川巡視などの仕事体験メニューを検討したが、KidZaniaより、子ども達に「体験する仕事がとても責任があるものであること」を伝える演出が重要であること、子ども達を惹きつける場面設定、体験する仕事の派手さではなく、その仕事の重要性を感じさせるプログラムの質の検討を求められた。

そこで、普段は入れないことから子どもにとって魅力的な空間であろうと考え災害対策室をフィールドとし、水防災意識向上の目的を果たすために、誰も体験したことがあるであろう台風を題材に、大雨による洪水から街を守ることについて、洪水対応訓練の体験をしてもらうことを企画した。特に重視した事は、子ども達を飽きさせないようにメニューを工夫した。具体的には、洪水対応訓練の必要性や重要性を理解したうえで体験してもらうために事前に荒川放水路の歴史や岩淵水門の役割についての説明。パネルや立体地図、流水模型を活用した実験学習。洪水対応訓練での作業体験。台風が接近する時に住民としての自助活動の必要性を学ぶために自分自身が取る防災行動を時系列にまとめる「マイタイムライン」の作成。説明、実験、作業、作成と違ったタイプを体験するメニュー構成とし、印象に残り飽きさせない仕事体験メニューとすることで、より一層の水防災意識向上となるプログラムとなるものと考えた。

(2) よりインパクトのある広報展開の工夫

事前広報を行うにあたっては、多くの人に知らしてもらい、目にとめてもらえるインパクトのある広報展開について検討した。1点目は、効果的なイベントの告知とするために、募集開始日を、災害に備える意識の高まる9月1日の防災の日とした。2点目は、子どもを持つ保護者などへの情報発信として、朝日新聞への広告掲載を行った。3点目として、荒川はん濫を想定した水害への備えを進めている東京メトロへの広報協力依頼（東京メトロ130駅にポスター掲示）を行った。上記の他にも記者発表、事務所・KidZania HPでの情報発信、チラシ配布等広報展開を行った。その結果、募集から約2週間で定員90名を越える応募があるなど大きな反響があった。

参加者へのイベント認知先アンケートでは、半数はKidZania HPであったが、事務所HP、駅のイベントポスター、駅や公共施設のチラシ、新聞広告についてもそれぞれ1割程度であり、一定の効果があったと思われる。

また、ポスター、チラシの宣伝効果としては、イメージしにくい国土交通省の仕事体験内容を告知する上で、

災害対策室モニターの写真は、具体的な仕事内容をイメージさせることができたと考えられる。



図-1, 写真-3 ポスター及び東京メトロ浅草駅掲載状況

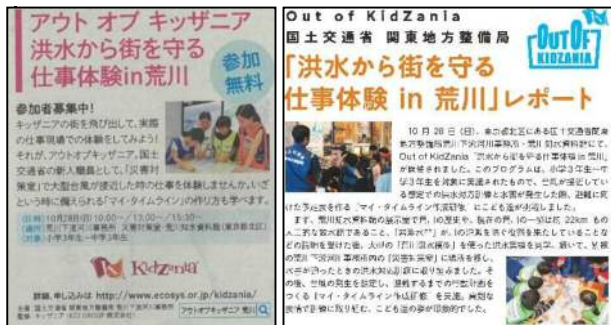


図-2 朝日新聞掲載状況（事前広告）， 図-3 朝日新聞掲載状況（事後広告）

(3) KidZaniaスーパーバイザーによる事前研修の実施

当日の運営・実施は、職員自ら行うことから、事前に豊洲にある「KidZania東京」にてKidZaniaスタッフであるスーパーバイザーから、子ども達にプログラムを飽きさせずに実際の仕事に近い臨場感のある状況を体験してもらうための「子ども達への接し方のポイント」等の指導を受ける事前研修を受講した。

事前研修では、子ども達がより大人として参加できるようにするための言葉使い「KidZaniaワード」を学んだ。子ども達をしっかりと見ていないと出来ない褒め方のポイントや子ども扱いしないことが大事であることや言葉やジェスチャーだけでどれだけ相手に内容を伝えることができるかなどの実地研修を受けた。参加した職員は、片方だけで伝えることの難しさを体験した。褒めなくてはと構えてしまうのではなく感謝の気持ちを持って、子ども達とのコミュニケーションを楽しむことが重要であることを学んだ。



写真-4 KidZania 東京での事前研修の様子

(4) こども議会議員と職員子ども達参加の事前リハーサルの実施

運営プログラムについては、実際の洪水対応等に即したものを基本としながら、作業の目的などをわかりやすく伝え、限られた時間で子ども達が普段体験する事ができない仕事としての充実感をもってもらえるかなどを念頭にKidZaniaスタッフの意見を聞きながら何回にもわり修正を行った。

とりまとめた運営プログラムを用い、イベント開催2週間前にプログラムの確認のため、KidZaniaの運営に子どもの目線で意見を述べる為に選ばれた子ども達「こども議会議員」に参加してもらい事前リハーサルを実施した。こども議会議員は様々なKidZaniaプログラムの事前リハーサルを経験しており、こども目線での的確かつ厳しい意見が出された。また、こども議会議員だけではなく、仕事体験の経験がない子ども達からの意見ももらうため、職員へ子ども達の参加を仰いだところ、普段見ることのない親の仕事内容に触れることができると多くの子ども達に参加頂いた。

その結果「専門用語が分かりにくい」「途中で何もしない時間がある」等の意見が出されたことから、使用する訓練の書式や用語の見直し、体験する作業をわかりやすく伝えるための事前説明時間の追加やモニターを用いた説明を加え、各作業の流れの修正などのプログラムの見直しを行った。あわせて、より臨場感を感じてもらうためにモニター表示について、台風が接近している様子を写したり、岩淵水門が閉鎖する様子を何枚もの写真を重ね合わせて動きのあるスライドを作成したり、水門閉鎖後に墨田川の水位が下がり、荒川の水位が上がっていく様子についても動きのあるアニメーションを作成して画面を示しながら伝えることで、目で見て洪水対応訓練の内容が理解できるような見せ方も工夫をした。



写真-5 事前リハーサル実施後の評価をする様子



図-4 プログラム運営ガイドライン

洪水から街を守る仕事体験 in 荒川 プログラムガイドライン	
班名	支部運用班
役割	各支部(市区町村、連携機関)に正確な進捗、報告
新人職員数	各班10名(2名×5グループ) 計3班
先着職員数	3名
仕事内容	<p>① 警報、停電など連絡文書種別(レクチャー) -FAX, twitterの文章をもとに配信する順番と内容を確認。 -配っていないものがあればもらうよう申請。</p> <p>② 水門閉鎖 連絡 FAX(用紙: 支-1), twitter(用紙: 支-2)原稿作成。 -役割(2人で分担して行う)を決める。 -FAX, twitter 文章に必要な情報の記載。</p> <p>③ 用紙: 支-1を受け取る。 用紙: 支-1,2の記載。</p> <p>④ 「支部長」決裁をもらう。 -マイクで状況を伝える。 -(5グループ 支部運用班です。これより「水門閉鎖連絡」を配信します。支部長決裁をお願いします。)</p> <p>⑤ 「岩淵水門閉鎖連絡」の発信。 -FAX 原稿(用紙: 支-1)を「情報管理班」へ渡す。 -twitter 原稿(用紙: 支-2)を完成に渡す。</p> <p>⑥ 岩淵水門閉鎖を確認。 -全員で確認。</p> <p>⑦ 水位、雨量の確認。 -(用紙: 支-3,4)を電気通信班から受け取る。 -どのレベルが確認をする。</p> <p>⑧ 「水防警報(出動)」(用紙: 支-3)発信準備。 -役割(2人で分担して行う)を決める。 -FAX, twitter 文章に必要な情報の記載。</p> <p>⑨ 「支部長」決裁をもらう。 -マイクで状況を伝える。 -(5グループ 支部運用班です。これより「水防警報(出動)」を配信します。支部長決裁をお願いします。)</p> <p>⑩ 「水防警報(出動)」の発信。 -FAX 原稿を「情報管理班」へ渡す。 -twitter 原稿を完成に渡す。</p>

図-5 プログラム運営ガイドライン

4. 実施概要

(1) 荒川を知るための事前学習(流水模型等の実験)

当日は、参加した子ども達に仕事体験をしてもらう前に体験する仕事は何のために行われるものなのか理解してもらうため、荒川知水資料館で大雨の度にはん濫を繰り返す「荒ぶる川」と呼ばれた荒川の洪水の歴史や明治43年の大洪水を契機として始まった荒川放水路の歴史や人口増加や産業の急激な発展に伴う地下水汲み上げに起因する地盤沈下により広範囲にわたるゼロメートル地帯の出現など、荒川下流域のリスクを説明するとともに、荒川下流河川事務所が取り組んでいる治水対策や首都圏を守る重要な治水施設である岩淵水門の役割についてパネルや立体地図、流水模型などを使い事前学習を行った。



写真-6 荒川放水路の歴史を説明する様子



写真-7 流水模型を使い岩淵水門の役割を説明する様子

(2) 災害対策室における洪水対応訓練

事前学習を終えた後、災害対策室において新人職員の立場で先輩職員の指導を受けながら洪水対応訓練を行った。実際の洪水対応では、事前の対応を含め、長時間にわたり様々な内容の仕事があるが、限られた時間の中で体験してもらうため、荒川の水位が上昇し、隅田川への流入を防ぐための水門閉鎖までを対象とした。まず、荒川の水位の確認、水門の閉鎖、自治体への連絡を行うため、支部運用班、情報管理班、電気通信班に分かれて各班の役割を確認することから始めた。

支部運用班は、岩淵水門操作結果連絡やtwitter情報発信のための原案を作成して、支部長決裁をもらい情報発信を情報管理班に依頼。情報管理班は、雨量や河川水位の情報や岩淵水門閉鎖の情報をクロノロジーに記載。また、支部運用班からの水門閉鎖の情報を自治体にFAXにて連絡して受信確認を実施。電気通信班は、支部運用班からの岩淵水門閉鎖の準備に関する情報を入手し、操作に関する方針について検討した後、支部長決裁をもらい地域住民への注意喚起放送後に岩淵水門を閉鎖して河川の状態をCCTVカメラを操作して確認する訓練を実施した。各班が情報をやりとりしながら首都圏を守るための洪水対策を実施した。

事務所職員は、子ども達が行う1つ1つの仕事が荒川沿川の地域住民の生命を守る大事な仕事である事を伝えながら洪水対応訓練を実施した。



写真-8 CCTVカメラを操作して確認する様子



写真-9 支部長決裁の様子

(3) マイタイムライン作成研修

最後に、体験を今後の防災活動に活かしてもらうため洪水で川の水があふれて街に流れ込む可能性がある時、洪水から身を守るための行動予定表（マイタイムライン）を各グループで作成し発表した。

北区で実際に配布されているハザードマップを活用し、その地域に住む住民となってもらい、各グループ毎に家族構成や住まいを変えた条件を示した。その家族が住んでいる場所を示したハザードマップと予想浸水深から避難場所をさがしてもらい、台風の移動に応じて、どの時点でどのような行動を起こすべきかをグループみんなで考えて行動例のシールを貼ったり、高齢者がいる場合には早めに避難する、赤ちゃんがいる場合にはミルクを用意する、持病を持つ家族がいる場合には薬を用意するなど、家族の特徴をもとに必要な行動を考えてシールに書き足してもらった。

子ども達は、様々な地域からの参加であったため、北区住民としてマイタイムラインを作成してもらうこととしたが、家族や地形の特徴、過去の洪水といった自宅周辺のリスクは各人それぞれであることから、マイタイムラインを作成するにあたっての情報の入手方法や自分自身に置き換えて考えて振り返りをしてもらうために「マイタイムラインブック」を子ども達に配布し、帰宅後に自分のマイタイムラインを家族で話し合って作成してもらうこととした。また、講評の時間を設け、ここで学んだことを子ども達が住んでいる地域の人に伝える仕事を依頼しイベントのみにとどまらず防災に関する意識が広がることに期待した。



写真-10 マイタイムライン研修の様子



写真-11 みんなで作成したマイタイムラインを発表する様子

(4) 保護者への対応

通常のKidZaniaのプログラムにおいては、子供が主役の仕事体験の場であることから、保護者は施設の外から見学しているため保護者向けの説明などの対応は必要ないとの事であったが、災害対策室に見学席を設け、子ども達が荒川知水資料館で事前学習を行っている間、この待ち時間を有効に活用して、保護者に対して国土交通省が行う水防災への取組や災害が起きた際の避難の重要性についての説明を行うこととした。



写真-11 保護者に対する説明の様子

5. 実施効果

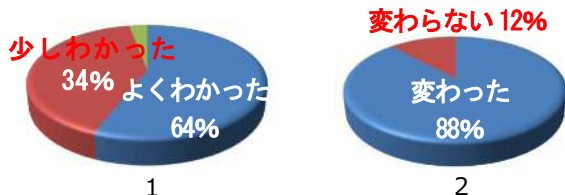
(1) アンケート結果

保護者へのアンケートの結果、国土交通省の取組についての理解度では、98%がよくわかった、少しわかったと回答。また、88%が水防災への意識が変わったと回答。今後同じようなイベントがあれば、91%が参加したいと回答された。

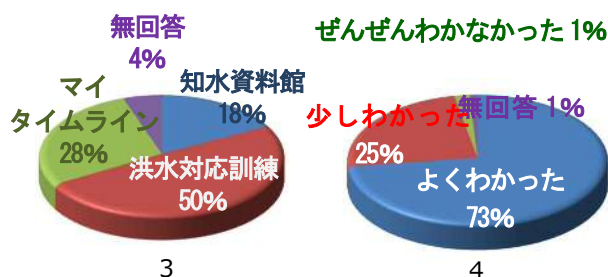
子ども達へのアンケートの結果では、国土交通省の仕事についての理解度では、98%がよく分かった、少し分かったと回答。また、半数の子ども達が洪水対応訓練が一番楽しかったと回答があり、特に知水資料館では、立体模型や流水模型が楽しかったと回答。洪水対応訓練では、FAXを送ることや支部長に報告することが楽しかったと回答。マイタイムライン研修では、みんなとつくっ

たので楽しかった。マイクで発表したのが楽しかったと回答があり、仕事体験は、大きな効果があった。

あまりわかなかった 2%



グラフ-1 国土交通省の取組への理解度・グラフ-2 水防災への意識変化（保護者アンケート結果より）



グラフ-3 一番楽しかった事・グラフ-4 国土交通省の仕事理解度（参加者アンケート結果より）

(2) 水防災や避難の重要性の意識向上

保護者からは「タイムラインで家族の情報を共有して今日の体験を活かしたい。」「子ども自身は、災害＝避難と考えがたがらずにいると日々感じていたため、今回の体験を通して、「自分の身は自分で守る」という事を意識してもらいよい機会になったと思います。親子で良い体験になりました。」などの意見を頂いた。子ども達へのわかりやすい説明は保護者にとってもよい学びの時間となり、今回は空いた時間を利用した保護者への説明や保護者が見ていることを意識したプログラムにより、水防災や避難の重要性を伝えることができたと考え。

(3) 職員のスキルアップ

子ども達及びその保護者への水防災意識の普及啓発と意識の向上を目指した取組としてイベントを実施した結果、子ども達（新人職員）の先輩職員として参加した事務所職員は、子ども達が自分達で考えることを促したり、子ども達にわかりやすく伝えるためのノウハウを得ることができ、職員のスキルアップが図れたものと考え。保護者からのアンケートからも運営に関わる職員・スタッフの熱意や姿勢が素晴らしいとの言葉を多く頂いた。

6. 反省点

(1) プログラム実施時間

今回、1回90分のプログラムで3回実施したが、各回で約10分、時間を超過してしまった。支部長決裁やFAX送信が集中してしまい順番待ちや受信確認に時間がかかってしまったことが主な原因であった。

また、作業内容をきちんと理解してもらうための事前説明が大切ではあるが、保護者にも理解して頂ける様意識したため、時間が長くなってしまった。事前リハーサルにおいては、プログラムの確認に重点を置いていたことから、本番の5班ではなく、3班で実施したこと、こども会議員はKidZaniaが連れてきたため、保護者は職員のみであったことなど、本番と異なる点も多く、より本番に近い状況でのリハーサルを行う必要があったと感じた。

(2) 班体制

子ども達を1班6人の5班体制で洪水対応訓練を行ったが、班によっては、他の班からの報告を受けるまでに間が空いてしまう時間があった。同時進行で各班スムーズに行える運営体制として、タイムキーパーが積極的に訓練時間を設定するなど子ども達自身で時間を意識できるような検討が必要であると感じた。

(3) 実施回数

1日で3回実施したが、緊張感を持って仕事体験を行うことは、当初予想していた以上に職員の労力を要したため、実施回数の検討が必要であると感じた。

7. おわりに

この取組は、1回で終わってしまうものではなく、持続可能なものでなくてはならない。今後も継続的に実施していくために、プログラムのレベルを下げることなく、設定した時間内で終了することが出来るように班体制、時間割、実施内容等の見直しを行っている。また、子ども達が主体的な立場で水防災の向上やより深い認識がはかれる「KidZania監修プログラム」を継続的な取り組みとして今後も展開するにあたり、来年度以降の展開を見据えて今秋にもプログラム内容を見直した試行を行う予定である。また職員には、当日のみでなく事前研修や準備を含め参加してもらったため、事務所全体で協力して取り組む必要があると感じた。さらには、説明者のレベル維持を確保するためにも、継続的に実施して経験を重ねることができる実施体制の構築も検討していく必要があるものと考えている。

出典

- 1) KidZania オフィシャルサイト
- 2) KCJ GROUP ホームページより